

つた友人の消息を通じて一つ一つ確認されてゆくのであるが、とりわけ第一一句以降の衛八の子供たちに焦点を当てて詠じた四句は、結婚して子供をもうけ家庭を築くという、世間的には無名の一人の男がたどった二十年の歲月の重みを、ずっしりと確かな手触りを感じさせてくれる。また、『礼記』の語彙をちりばめた子供たちとの応答の描写からは、蹠の行き届いた衛八の子供たちと、それを見つめる杜甫の温かい眼差しも感じられよう。

一五句以下の第三段では、衛八一家の歓待のさまとそれを受ける杜甫の心の動きとが、具体的な細部の描写を重ねるように描かれる。中でも、第一七・一八句の食べ物の描写は、雨に濡れた韭の鮮やかな緑、炊きたての飯にまじる大粟のつややかな黄色までが目には浮かぶようで、きわめて印象的である。詩中唯一のこの素朴な対句のうちに、衛八の心のこもった歓待ぶりが余すところなく描かれている。

また、第二〇句末の「十觴」の語を次句の冒頭に繰り返す、いわゆる蟬聯体の技法も巧みな効果を上げている。立て続けに「十觴」をおおる衛八の行為を承けて、杜甫自身の行為と心情の表出へと主体の転換がスムーズに行われ、ともに再会の喜びに浸っている主客の心のうちそとを生きいきと描き出している。そして最終二句では、そのような感慨に浸る杜甫の胸中に、早くも兆した離別の悲しみを述べて一篇の結びとする。冒

頭と末尾の、個人の力では如何ともしがたい別離への慨嘆に縁どられて、その間に描かれた具体的な再会の喜びが一層輝いて見える巧みな構成である。

なお、この詩については桑原武夫「杜甫の『贈衛八處士』について」（吉川幸次郎・桑原武夫『新唐詩選続編』岩波新書、一九五四年）が分析批評的手法を用いて詳細な鑑賞を行っており、示唆に富む。

（坂口）

夢李白二首

其一

李白を夢む二首
其の一

死別已吞声

死別は已に声を吞めども

生別常惻惻

生別は常に惻惻たり

江南瘴癘地

江南は瘴癘の地

逐客無消息

逐客消息無し

故人入我夢

故人我が夢に入り

明我長相憶

我の長く相憶ふを明らかにす

恐非平生魂

恐らくは平生の魂に非ざらん

路遠不可測

路遠くして測るべからず

魂來楓林青

魂來たれば楓林青く

魂返閨塞黑

魂返れば閨塞黒し

今君在羅網

今君は羅網に在り

何以有羽翼

何を以て羽翼有るや

落月滿屋梁

落月屋梁に満ち

猶疑照顔色

猶ほ顔色を照らすかと疑ふ

水深波浪闊

水深くして波浪闊し

無使蛟竜得

蛟竜をして得しむること無かれ

李白を夢にみて 二首

其の一

死別はもはや声を押し殺して耐えるしかないが、生き別れはいつまでも心がいたむ。

江南は熱病を引き起こす毒気のたちこめる土地、そこに放逐された旅人からは何の便りもない。

その旧友が私の夢に現れ、私があなたをいつまでも思い続け

ていたことを証明してくれた。

どうも日ごろの魂とは違うようだが、道のりが遠いので推し測りようもない。

魂がやってきたとき江南の楓樹の林は青々と茂り、魂が帰ってゆくとき辺境の秦州の町は黒々と横たわる。

今、あなたは囚われの身であるのに、どうして翼を得てここに来られたのか。

傾きかけた月の光が部屋梁のあたりに満ちあふれ、まだあなたの顔を照らしているかのようだ。

長江の水は深く波がはてしもなく広がっている。どうか蛟竜の餌食になることのないように。

○吞声 悲しみの声を押し殺す。忍びなく。南朝宋・鮑照「擬行路難十八首其四」に「心は木石に非ざれば豈に感無からんや、声を呑み躑躅して敢へて言はず」とあり、杜甫「哀江頭」にも「少陵の野老声を呑みて哭す」の句が見える。○生別 生き別れ。『楚辞』九歌「少司命」に「悲しきは生別離よりも悲しきは莫し」とある。○惻惻 心がいたむさま。○江南 長江の南岸一帯の地。李白は、至徳二載（七五七）に潯陽（江西省九江市）の獄に投じられた。○瘴癘 南方の地にたちこめる毒気（瘴気）によっておこると考えられた熱病。隋・孫万寿「江南に遠戍して京邑の親友に寄す」に「江南は瘴癘の地、従来逐臣多し」とある。○逐客 罪を得て放逐された旅人。李白をいう。○長相憶 いつ

までも李白を思い続ける。「相」は、動詞の上について動作の及ぶ対象があることを示す接頭語。古楽府「飲馬長城窟行」(『文選』卷二七)に「上には餐食を加へよと有り、下には長く相憶ふと有り」とある。○平生魂 普段の李白の魂。○楓林 楓樹の林。

「楓」は、マンサク科の落葉高木。李白がいる江南の風物。『楚辞』宋玉「招魂」に「湛湛たる江水 上に楓有り」とある。また、魏・阮籍「詠懷詩十七首 其十七」(『文選』卷二三)に「湛湛たる長江の水、上に楓樹の林有り」とある。○関塞 国境地帯にある関所と要塞。辺境の町である秦州をさす。○羅網 鳥を捕らえる網。なお、清・仇兆鰲「杜詩詳注」では、「今君在羅網、何以有羽翼」の二句を「恐非平生魂、路遠不可測」の前に置く。○蛟竜 竜の一種。水中に住む竜。みずち。

◎詩型 五言古詩 ◎韻字 側・息・憶・測・黒・翼・色・得 (入声一三職)

至徳元載(七五六)、肅宗の弟の永王李璘が江南で挙兵すると、廬山に隠棲していた李白は請われてその幕僚となる。しかし、永王の軍が政府から反乱軍として討伐されるに至って、李白も反逆罪に問われて潯陽(江西省九江市)の獄に繋がれ、乾元元年(七五八)には夜郎(貴州省桐梓県)に流されることとなった。その後、配所に赴く途中で大赦に遭った李白は、この詩が作られた乾元二年(七五九)秋にはすでに自由を得て、長

江を下りながら気ままな旅を続けていたが、遠く秦州(甘肅省天水市)にあつた杜甫はまだそのことを知らずにいたらしい。詩は、そうしたある夜、李白の夢を見て作った二首連作の第一首である。

詩の冒頭四句は、『杜詩詳注』に「首は夢を致すの由を叙す。」と注するように、李白の夢を見るに至った理由を述べた部分である。死別にもまして心いたむのが生別であるとする認識は、消息のわからぬ李白への気遣いとなって第五句以降に具體的に展開する。

第五句から第二二句までは、夢に現れた李白の様子を述べる。長く憶い続けていた杜甫の気持ちに応えるように夢に現れた李白は、しかし、いつもの様子とは違っていた。それが杜甫の不安をかきたてる。「恐非平生魂」の句は、その死を危惧する杜甫の心の動きをよく伝えていよう。また、第九・一〇句の対句は、李白の魂がやって来る時と帰っていく時の情景を描いたものであるが、「青」「黒」という色彩表現が、夢の中の幻の情景にリアリティーを与えて効果的である。

第三句以下の結びの四句は、夢から覚めての李白への思いを述べる。目覚めると、沈みかけた月の光が屋内いっばいに差し込んでおり、その光に照らされて、李白の残像がそこにあるかのように感じられたのであろう。夢から覚醒した直後の、夢と現実のあわいにある朦朧とした精神の状態を伝えているかの

ような、印象的な句である。そして、その残像が消えたとき、李白の魂が帰ってゆく波浪さかまく長江の広大な流れを思い、ひたすらその身を案じる言葉をもって詩を結ぶ。ここにうたわれている「蛟竜」は、李白を待ち受けている政治的危険の象徴でもあろう。

友人が陥っている苦難の境遇に心痛めるその繊細な感受性が、夢の中の幻想の情景を描く感覚的な表現と相俟って、一種、異様な美しさを醸し出している一篇である。

其二

其の二

浮雲終日行

浮雲終日行

遊子久不至

遊子久しく至らず

三夜頻夢君

三夜頻りに君を夢む

情親見君意

情親 君が意を見る

告歸常局促

帰るを告げて常に局促たり

苦道來不易

苦ろに道ふ 來たるは易からず

江湖多風波

江湖には風波多く

舟楫恐失墜

舟楫の失墜せんことを恐ると

出門搔白首

門を出でて白首を搔く

若負平生志

平生の志に負くがごとし

冠蓋滿京華

冠蓋 京華に満つるに

斯人独顛顛

斯の人 独り顛顛す

孰云網恢恢

孰か云ふ 網恢恢たりと

將老身反累

將に老いんとして身は反って累せらる

千秋萬歲名

千秋 萬歲の名

寂寞身後事

寂寞たり 身後の事

其二

(卷三)

空に浮かんだ雲が終日流れてゆき、旅人であるあなたは長らく私のところにやってこなかった。

それがこの三晩は立て続けにあなたの夢を見た。その親愛の情によつてあなたの私を思う気持ちの深いことがわかった。

別れを告げてはいつも落ち着かない様子で、しきりに訴える、「ここまで来るのは容易ではない、

江南の川や湖のあたりは風や波が多く、船が転覆するのが心

配だ。」と。

門を出て白髪頭を搔いている、その姿は日ごろの思いにたがっているかのようだった。

高位高官の人は花の都にあふれているのに、この人だけはやつれている。

いったい誰が「天網恢恢」などといったのか。老年になろうとしてその身はかえって罪を得てしまった。

千年万年の後世に残る名声も、ひっそりと寂しい死後のことなのだ。

○浮雲 空に浮かぶ雲。不安定なものの象徴。○遊子 旅人。李白をいう。無名氏「古詩十九首 其一」(『文選』巻二九)に「浮雲白日を蔽ひ、遊子顧反せず」とある。また、李白「友人を送る」詩にも「浮雲遊子の意」の句がある。○情親 情愛が親密なところ。李白の杜甫に対する親愛の情をいう。○局促 慌ただしく落ち着かないさま。『草堂詩箋』は、「款曲せざるを言ふなり」と注する。○江湖 大きな川や湖。ここでは、李白のいる江南の地をいう。○舟楫 舟。「楫」は舟のかじをいうが、ここでは「舟楫」の二字で舟の意。○搔白首 白髪頭を搔く。頭を搔くのは、強い不安や焦燥を示すしぐさ。○冠蓋 冠と馬車の覆い。高位高官の人をいう。○斯人 この人。李白をいう。『論語』雍也篇に、難病になった冉伯牛を見舞った孔子が「命なるかな、斯の人に於て斯の疾有り」と嘆いた話が見える。○顚顚 やつれる。『楚辞』

屈原「漁父」に「顔色顚顚し、形容枯槁せり」とある。○網恢恢『老子』第七三章に見える「天網恢恢、疎にして失はず」の語。天の網は広く大きく、目が粗いようであり逃がすことがないとの意。○千秋万歳名 千年万年後の名声。永遠に伝えられる名声。魏・阮籍「詠懷詩十七首 其十二」(『文選』巻二二)に「千秋万歳の後、栄名安くにか之く所ぞ」とある。○寂寞 ひっそりと寂しいさま。○身後 死後。

◎ 詩型 五言古詩 ◎ 韻字 至・意・易・墜・志・顚・累・事 (去声四真)

乾元二年(七五九)秋、李白の夢を見ての連作二首の第二首。

冒頭四句は、第一首と同じく李白の夢を見るに至った経緯を述べる。定めなく流れゆく「浮雲」から「遊子」である李白の境遇を語る一・二句の連想の流れは、きわめて自然で間然するところがない。三・四句では、その李白が三夜連続で夢に現れたことを述べて、自身への親愛の情が示されたことを喜ぶ。

続く五句から一〇句までの第二段は、夢における李白の訴えと別れ際の表情が描かれる。夢の中の李白は日ごろの闊達な彼に似ず、慌ただしく行路の苦難を訴え、不安に満ちた表情で出てゆく。夢の中の李白の言動の描写によって、彼が置かれている現在の苦境を切迫感をもって伝えることに成功している。なお、通釈では、清・仇兆鰲が「帰るを告ぐの四句は、夢に其

の言を聞く。」(『杜詩詳注』)と注するのに従って、第六句の「来不易」から第八句の「舟楫恐失墜」までを李白の言葉として解したが、「来不易」のみを李白の言とし、第七・八句はその訴えを聞いている杜甫の思いと見ることもできる。

第一一句から末句までの第三段は、李白の不遇の運命に対する憤りと、名声を得ることなく終わってしまう境遇への哀惜の念が述べられる。中でも「孰云網恢恢」の一句は、『史記』伯夷伝における司馬遷の「天道是か非か」の問いかけにも通ずる、人間の運命の不条理に対する激しい憤りを含んでいる。

友人の失意と苦境を自己の痛みとして感受する、杜甫の誠実さがよく示された詩である。

ところで、夢に人が現れるという現象を、当時の人々はどのようにして起こるものと考えていたのだろうか。どうやら当時の人々は、相手がこちらを強く想っていたり、こちらに何かを伝えなかったりしたときに夢に現れると考えていたふしがある。例えば、『後漢書』独行伝の范式・張劭の逸話では、病死した張劭が范式の夢に現れて自分の埋葬の期日を告げているし、東晋・干宝『搜神記』にも、死者が夢に現れて何かを訴える話が散見する。この「夢李白」も、そうした当時の夢の觀念に基づいていると見るならば、第二首の「三夜頻夢君、情親見君意」の以下の句意も、極めて容易に理解できよう。李白が何度も夢に現れたのは、それだけ杜甫のことを強く想っているか

らであり、また「苦道」の後に示される自己の苦境を訴えんがためであつたと解し得る。そのように考えれば、現代人の目からは幻想性に富んだ作品と見えるこの詩も、当時の人々にとってはある種のリアリティーをもつて受け止められていたと考えられるのである。

(坂口)

天末懷李白

天末にて李白を懷ふ

涼風起天末

涼風 天末に起こる

君子意如何

君子 意は如何

鴻雁幾時到

鴻雁 幾時か到的

江湖秋水多

江湖 秋水多し

文章憎命達

文章 命の達するを憎み

魑魅喜人過

魑魅 人の過ぐるを喜ぶ

応共冤魂語

應に冤魂と共に語らんとして

投詩贈汨羅

詩を投じて汨羅に贈るべし

(卷一〇)